集英社文庫

歩きだした人形

佐野　洋

集英社

集英社文庫

歩(ある)きだした人形(にんぎょう)

1990年11月25日　第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者　佐野洋(さのよう)

編集企画　㈱佐野洋企画

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋2－5－10
〒101-50
電話　東京（230）6100（編集）
（230）6080（販売）
（230）6080（製作）

印刷　大日本印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© Y.Sano 1990

Printed in Japan

ISBN4-08-749653-8 C0193

江苏工业学院图书馆
藏书章

東英社文庫

歩いた形

佐野　洋

集英社版

目　次

はじめに……六
遠慮深い鍵……九
親切過ぎた的……三七
気まぐれな鏡……六七
不公平な声……九九
歩きだした人形……一二九
厳しすぎた砂……一五九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

疑わしい贈り物……一八九
訴える機関車……二一九
時間どおりの名前……二四九
早過ぎた年賀状……二七九
解説　清水谷　宏

歩きだした人形

シリーズ「赤枠の記事」

はじめに

一時期、私は地方から講演を頼まれると、よほどの支障がない限り引き受けるようにしていた。東京オリンピック前後のころだから、私もまだ三十代で、飛び回ることが少しも億劫ではなかった。若いうちに、あっちこっちを見て、見聞を広めて置こうという意識もあったようだ。

そのころの、私の講演の題は『最近の新聞から』というものだった。主催者に頼んで、その地方の地元新聞を二、三日分持って来てもらい、その記事の中から、いくつかをピックアップして講演の題材にしたのである。

新聞を受け取るのは、大ていは講演の始まる一時間かせいぜい二時間前である。言わば、ぶっつけ本番の感じだったが、講演に使う記事は、必ず見つけられた。私自身が若く、頭が柔軟なせいもあったからだろう。

取り上げるのは、殺人事件とは限らない。というより、地方に行くと、殺人事件が新聞に載っていることなどは稀で、そんなのを当てにしていては、講演ができない。だから、

ときには広告欄の人探しの記事をもとに、これで推理小説を作れば、どういうものになるか、というような話をしたこともある。

この『小説にするには、どうすればいいか』という持って行き方は、私にとっても便利であった。必ずしも話に結末をつける必要はないのである。

「推理小説は、最後が大事です。実は、いまここで結末を明らかにしてもいいのですが、私は、これを小説にして発表したい気持ちを持っています。そのときのために、いまここで、結末を明かすことだけは勘弁して下さい。皆さんにしても、それぞれご自分でストーリーの結末をお考えになるのが楽しいのではないでしょうか……」

と話を終ることができるのだから……。

しかし、そのうち、こんな形の講演ができなくなった。その第一の理由は、目の衰えである。四十代前半から、私は眼鏡なしには、新聞が読めなくなった。だから、この形の講演をするためには、壇上で眼鏡をつけたりはずしたりしなければならず、格好がつかないのだ。

そのような経験があったからでもないが、私は、新聞は、推理小説の題材の宝庫だと考えている。新聞記事はそのまま小説にはならないが、作家の脳細胞を刺激してくれるのだ。

それで、新聞を読むときには、赤鉛筆を持ち、興味を抱いた記事の周囲を赤線で囲むようにしている。

この本の副題につけた『赤枠の記事』とは、こうして拾い上げた記事のことである。

なお、記事を引用するに当っては、人の名などは、仮名あるいはイニシャルを使用、また省略、改行なども、私自身の判断で行ない、年・月などは算用数字を使うことにした。

遠慮深い鍵

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

◆印鑑と通帳が危ない＝朝日新聞昭和60・9・4（朝刊・川崎版）（以後、昭和は省略）

「印鑑と通帳は同じ場所に置かないで」

と、多摩署刑事課は、花の独身貴族に警告している。

同署は昨年5月から空巣七十五件、被害総額七百十七万円の犯行を重ねていた多摩区登戸、無職N・K（三九）を3日までに、横浜地検川崎支部に追送検した。

国鉄南武線沿線のアパートを中心に盗みまくったNの手口が一風変っていた。

一人暮しの多い、多摩区登戸、会社員Aさん（三二）は、今年1月23日、2月27日、4月9日と三回も被害に遭っている。

Nは一回目に洋服ダンスの引き出しから盗み出した印鑑と銀行預金通帳で額面約八十万円のうち十八万円引き出し、その足で印鑑と通帳を元の保管場所に〝返却〟。玄関口の隠し場所から捜し出したアパートのカギで合いカギを作り、二回目、三回目の犯行に利用した。

「おかしいな、預金がこんなに減るなんて」

と、一回目は被害届を出さなかったAさんだが、二回目に二十万円を引き出され、

「こんなに使った覚えはない」

と、多摩署に連絡した。Nは三回目に三十万円を盗んだ。

同様な手口の被害に遭った多摩区のOL、B子さん（二六）は、二回にわたって二十万円余を盗まれた。

同署で割り出した七十五件中、Aさん、B子さんを含め十件は二回以上荒らされたケース。

狙われたアパートの大半は一人暮しだが、戸締まりはしておらず、二十五件は被害届もなかったという。

現金狙いの空き巣だが、現金がなければ金目のものを盗んでいたNは、5月4日に多摩区の店員、C子さん（三六）方から持ち出したビデオデッキとカメラ（十三万円相当）を質に入れようとして、聞き込み中の多摩署員にマークされた。（中略）

独身の場合、預金通帳の残高を常に確認しておく人は、意外に少ないらしい――

ずいぶん遠慮深い泥棒である。せっかく預金通帳と印鑑を盗みながら、なぜ一度に全額をおろさなかったのだろう。また、二度目はともかく、三度目のときに、刑事が張り込んでいるかもしれないとは考えなかったのか。

私は、そんな疑問と同時に、被害者の方にも興味を持った。

Aさんは独身で一人暮しだという。それなら、鍵を自分で持ち歩いていてもいいはずであろう。なぜ、玄関口の隠し場所に置いたりしたのか……。

このように考えているうちに、アイデアがふくらんで行った。

＊　＊　＊

北上靖代が、何者かに殺害された、という話を刑事から聞いたとき、三沢は震え出した。人間は、自分の筋肉や神経を、制御できないものらしい。こんなところで震え出したら、刑事に疑われると思いながらも、三沢は、その手の震えをどうすることもできなかった。

「どうしたんです？　気分でも悪いのですか？」

と、狐のような目をした刑事が聞いた。刑事は二人でやって来て、もう一人の若い方は、眼鏡をかけていた。

「いいえ……。あまり、突然な話なのでびっくりしてしまって……」

三沢は、言葉の途中で咳払いをした。口の中が乾ききり、声がかすれていることに気づいたのだ。

「ところで、君と被害者の関係なんだけれど、君は、ときどき、被害者のマンションに行っていた。それは認めますか？」

「ええ……」

刑事が、こんなに早く彼のことを突き止めたのは、あの教員夫婦から聞いたのだろう、と三沢は考えていた。

靖代のマンションの隣室に住む夫婦で、二人とも小学校の教員をしている。靖代は、その奥さんの方と親しくしており、三沢についても、ある程度のことは話しているということだった。

「最近では、いつ、被害者宅に行きましたか？」

「ええと……。おとといの火曜日でした。会社が終ってからですから、七時ごろ向うに着いて……」

「そのとき、何か変ったことがありませんでしたか？」

狐の目の刑事は、目を一層細くした。目の動きを見せないため、ことさらにそのようにしているのかもしれない。

「変ったこと、と言いますと？」

「あなたたちは何か言い争いをしていたらしいですなあ」

「ああ……」

――その日、靖代の態度は、最初からおかしかった。

いつものように、三沢の上着を脱がしてくれることもなかったし、

『いらっしゃい』

と迎えた表情も、妙に固かった。
しかし、それでも、座卓の上に、ビールやコップだけは用意し、
『飲みたいんでしょう？』
と、注いでくれた。
『どうしたんだい？　ご機嫌斜めという感じだな』
彼はコップにビールを受けながら聞いた。
『あなた。あたしに、隠していることがあるでしょう？』
靖代は、自分の分は注がなかった。
『隠していること？』
三沢は唾液をのみこんだ。大西由起子のことがばれたのか？　しかし、もしばれたのなら、この機会に、はっきりさせた方がいいだろう。大西由起子とは、いずれ別れることになっているのだから……。
『そう。これよ』
靖代は、座卓の下から取り出したものを、三沢につきつけた。銀行の預金通帳だった。
『え？　何のことだ？』
『白ばっくれて……。ここを見てちょうだい』
通帳を拡げて、靖代は指で示した。一週間前に、二十万円が引き出されている。

『二十万円がどうしたって？』

靖代は、意外に金を持っているらしい。二十万円の引き出しのあとにも、残高が百四十万余あることを、通帳は示していた。

『これ、あなたが引き出したのでしょう？　あたし、お金が惜しくて、こんなことを言っているのじゃないのよ。あなたが、どうしてもお金が必要だというのなら、これ全部使ってもらってもいいんだもの。でも、黙って泥棒みたいなことをされると、やっぱりいやだな』

『待ってくれよ。ぼくは全く覚えがないんだ。この通帳だって初めて見たんだし……』

『そんな……。これ、三面鏡の下の引き出しに入れてあったのよ。あなたも、三面鏡は使うし……。通帳の傍に判子もあったので、つい黙って使う気になったのじゃない？』

『不愉快だな。ぼくが、そんなことをする人間かどうか、わからないのか？』

『だって、あなた以外には考えられないんだもの。そうでしょう？　あたしは、外出のときは、必ずドアの鍵をかけておくし、その鍵の隠し場所を知っているのはあなただけなんだもの……』

『しかし、だからと言って、ぼくがやったという証拠もないだろう。第一だね』

と言いかけて、三沢は言葉を切った。それを口にすると、喧嘩がますます変な方向に進むような気がしたのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor